

「放課後寺子屋教室」の成果と課題

Results and Continuing Issues of after school program “Terakoya”

渡邊淳一*

Junichi WATANABE

1. はじめに

平成 25 年度、本学児童学科 4 年生のうち小学校教師を目指す 42 人の学生が、津山市立高倉小学校（以下「高倉小」という。）の「放課後寺子屋教室」（以下「寺子屋」という。）で講師を務めた。寺子屋は放課後を利用した補充的な学習サポートであり、その目的は児童の学習習慣の定着と算数の基礎学力の向上にある。本研究の目的は、寺子屋の目的を達成する上で学生が取り組んだ概要を報告し、特に学習習慣の定着の観点から、その成果と課題を明らかにすることにある。

2. 寺子屋実施の背景

(1) 岡山県の児童の学力・学習習慣をめぐる課題

近年、岡山県の児童生徒の学力が全国的に見て厳しい状況にあることが憂慮されていたが、2012 年度（平成 24 年度）の全国学力・学習状況調査（小学校 6 年生と中学校 3 年生対象）の結果で、岡山県の平均正答率の全国順位が 45 位（小 6）、42 位（中 3）といずれも過去最低であったことは、岡山県の教育関係者に多大なショックを与えた。学力だけでなく、学習習慣についても、岡山県の小学生は「平日 1 日当たり 1 時間以上勉強をする」の回答が全国平均より 2.4 ポイントも下回っていた（全国 59.5、岡山県 57.1）。これに対する学校の対策も「放課後を利用した補充的な学習サポートを実施した」の回答が全国平均より 24.5 ポイントも下回るなど¹、児童の学力の向上及び学習習慣の形成が喫緊の課題であることが教育関係者共通の認識となった。

さらに、2013 年度の全国学力・学習状況調査では、岡山県の市町村別の平均正答率が報道された²（2012 年度は抽出方式だったため集計されていない）。これによると、津山市の小学校 6 年生の平均正答率は国語・算数とも県平均を下回っていた（算数 A は 74.5 点で県平均-0.1、全国平均-2.7、算数 B は 53.3 点で県平均-3.9、全国平均-5.1）。

こうした状況が明らかになる以前から「郷土の子どもたちの学力を何とかしなければ」という機運が高倉小の教職員、PTA、地域に高まっており、特に、PTA や地域の方々からは、子どもたちの学力向上のために惜しみなく学校に協力したい旨の声が上がっていたという³。そして、全国学力・学習状況調査における岡山県や津山市の実態が、高倉小における放課後を利用した補充的な学習サポートを実施する決定的な動因になったと言えよう。

(2) 教職実践演習の必修化

一方、教員を目指す学生が実地に児童の指導を経験できることは、本学にとっても時宜にかなっていた。

平成 25 年度から教員免許状授与の前提として「教職実践演習」が新設・必修化された。これは、2008 年の教育職員免許法施行規則改正により、2010 年度入学生から教職科目として履修が課されたものである。2006 年の中教審答申によれば、教職実践演習は「教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するもの」であり、学生にとっては 4 年間の教職関連科目の「学びの軌跡の集大成」となる科目である。また、この科目の履修を通じて「将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ること」ができるため、省察と探究を繰り返すことによって「教職生活をより円滑にスタートきるようになる」ことが期待されている⁴。

しかし、教職実践演習をどのように実施するかについては、課程認定大学にとって容易ではない課題であった。特に、同答申が求める教員としての「使命感や責任感、教育的愛情」「社会性や対人関係能力」などは、講義だけでなく、実際に児童や教職員、保護者や地域の方々に接

*美作大学生生活科学部児童学科 教授

して体験的に涵養される性質のものである。また、児童理解や学級経営、教科の指導力についても、学校現場の視点を取り入れながら学習することが、実践的指導力の基礎を培うために必須の条件である。

このような教職実践演習の趣旨・ねらいに照らして、学生が寺子屋で講師を務めることはこれ以上ない機会であり、児童を実地に指導する体験を数多く重ねることによって、学生の実践的指導力の基礎が固められることが期待された。

(3) 子どもの放課後の変化

近年、単親家庭の増加、就労形態の変化等によって、放課後の保育に欠ける状態が増えている。また、子どもが犠牲となる犯罪の発生等によって、地域社会の中に児童が安全かつ安心して遊べる場が減少している。こうした状況の中、平成 18 年に「放課後子ども教室」（文部科学省）と「放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ・学童保育）」（厚生労働省）を連携して実施する「放課後子どもプラン」が創設された。その目的を端的に言えば「安心・安全な居場所づくりと学校を核とした地域コミュニティの再生」⁵であった。そのうちの「放課後子ども教室」は、「すべての子どもを対象に、地域の方々の参画を得て、学習や様々な体験・交流活動、スポーツ・文化活動等の機会を提供する取組」である⁶。つまり、放課後の保育に欠ける子どもだけでなくすべての子どもに対する育ちの保障を官民一体となって行おうとするものである。このように、社会の変化と、学校を中核とした教育・福祉施策による育ちの風土づくりが、寺子屋実施の遠因となったことは想像に難くない。

3. 寺子屋の概要

寺子屋実施の概要は次のとおりである。参加児童：高倉小が児童と保護者に寺子屋の趣旨を説明し、希望者を募った。その結果、3 年生 17 人（21 人中）、4 年生 14 人（18 人中）、5 年生 19 人（24 人中）、6 年生 11 人（21 人中）、計 61 人（84 人中）が参加した。なお、1・2 年生の希望者に対しては、地域のボランティアグループによる読み聞かせや個別学習支援及び文化的学習が、放課後寺子屋と並行して高倉小隣接の公民館で行われた⁷。1 年生の参加者は 8 人（11 人中）、2 年生は 10 人（12 人中）であった（写真 1、2）。実施日時：平成 25 年 5 月から平成 26 年 2 月末までの、水曜日の放課後 60 分。高倉小と本学の行事予定により、実施できたのは年間 24 回であった（表 1）。実施形態：高倉小における学生の動きは表 2 の通りであった。指導内容と方法：指導内容は算数の復習で、前学年の問題集をテキストとした。講師を務めた 42 人の学生は約 5 人ずつ 8 班に分かれ、児童の 1 学年に 2 班ずつが担当された。1 班が一斉指導担当、もう 1 班がその様子を観察記録、その後全員で個別指導

というように役割を分担、ローテーションして行った。学生は算数の教科書とドリルを基に年間の指導計画を立案し、一斉指導担当単元については事前に指導案・板書計画を作成して教材を開発した。そして、教職経験が豊かな実務家教員による事前指導を受け、寺子屋に臨んだ。寺子屋の 60 分間は、途中で休憩をはさみながら、約 4 分の 1 が一斉指導（写真 3、4）、4 分の 3 が個別指導（写真 5、6、7）に割り振られた。学生が講師を務める様子は毎回ビデオ録画するとともに大学教員 1～3 名が参観指導した（写真 8）。さらに、寺子屋実施直後に大学に戻り、参観した大学教員による事後指導と、学生によるビデオをもとにしたグループ省察が行われた。



写真 1 学習支援



写真 2 紙芝居

表 1 寺子屋実施日

月	実施日(備考)
5月	8日(ガイダンス)、15日、29日
6月	5日、19日
7月	3日、10日
9月	4日、11日、18日
10月	2日、9日、16日、23日、30日
11月	20日、27日
12月	11日、18日
1月	8日、15日、29日
2月	12日、19日、26日

表 2 寺子屋の実施形態

時間	内容
14:25～14:35	教務主任による情報提供
14:35～15:35	寺子屋
15:35～15:45	教務主任との情報交換



写真 3 一斉指導①



写真 4 一斉指導②



写真 5 個別指導①



写真 6 個別指導②



写真7 個別指導③



写真8 大学教員の指導

4. 寺子屋の成果と課題

児童の学習習慣の定着について、寺子屋の成果と課題を「抜粋学習状況調査」「児童アンケート」「教師インタビュー」の三つから検討した。

(1) 抜粋学習状況調査に見られる成果と課題

寺子屋を重ねることによって、児童の家庭学習の状況（「家庭学習習慣」）及び算数学習に対するとらえ方（「算数観」）がどのように変化するかについて、質問紙による調査を行った。質問項目は、小学校6年生対象の「全国学力・学習状況調査」（文部科学省）から抜粋して作成した。本研究に係る調査項目だけでなく、高倉小の教育活動に資するよう、家庭学習に関する6問（「家庭学習習慣」）、家庭生活に関する6問（「家庭生活習慣」）、学校生活に関する2問、算数に関する10問（「算数観」）、計24問で構成した。調査対象は寺子屋の不参加者を含む3年生から6年生までの全児童84人で、調査は寺子屋が始まって間もない6月上旬と、寺子屋が終了した2月の2度、各担任教師によって行われた。

1) 家庭学習習慣と算数観に関する分析結果

家庭学習習慣と算数観に関する質問の回答は、いずれも「1 あてはまる、2 どちらかといえばあてはまる、3 どちらかといえばあてはまらない、4 あてはまらない」の4件法であった。そこで、「1 あてはまる」「2 どちらかといえばあてはまる」のいずれかの回答を「肯定回答」とし、その割合を従属変数として、放課後寺子屋の参加別（参加、不参加）と時期（6月、2月）を要因とする2要因分散分析を行った。欠席等による欠損値があったためリスト単位で除去し、最終的に分析対象となったのは76人（参加者56人、不参加者20人）であった。表3は参加別、時期別の肯定回答割合の平均値及び分散分析結果を示したものである。

まず、基本統計量から得られる全体的な特徴として、参加別では参加者の方が不参加者より肯定回答の割合が高かった。時期の特徴としては、6月の肯定回答の割合が2月より高かった（4・7）を除く。そのような特徴のある中、寺子屋の影響が推認されるのは、参加者と不参加者それぞれの時期の変化の仕方が統計的に有意に異なる場合、すなわち、交互作用が有意な場合と考えた。すると、「家庭学習習慣」では1・4「学校の授業の復習をしている」、「算数観」では4・9「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」が該当する。1・4は、肯定回答の割合が6月には参加者の方が有意に高かったが、不参加者の割合が6月より2月が有意に高くなり、2月における両者の差が有意でなくなったものである。不参加者の変化によるものであり、参加者は全体的な大まかな特徴と同様の変化であるため、寺子屋の影響とは考えにくい。一方4・9では、参加者の肯定回答の割合が2月になっても低くなっていないのに対し、不参加者の方は有意に低くなっていった。参加者のみが全体的な特徴に反して高い肯定回答率を維持しており、寺子屋の影響が推認される。このほか、4・1「算数の勉強は好きだ」では、交互作用は有意ではないものの、

表3 肯定回答割合の参加別・時期による2要因分散分析

	参加者(n=56)		不参加者(n=20)		時期	主効果 参加別	交互作用	下位検定結果
	① 6月	② 2月	③ 6月	④ 2月				
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F値	F値	F値	
1 あなたは家で次のようなことをしていますか(家庭学習習慣)								
1) 自分で計画を立てて勉強をしている	.696(.464)	.625(.489)	.400(.503)	.200(.410)	3.8415	12.6088 **	0.8619	①>③、②>④
2) 学校の宿題をしている	.911(.288)	.964(.187)	.950(.224)	.850(.366)	0.3541	0.4604	3.8738	
3) 学校の授業の予習をしている	.411(.496)	.232(.426)	.100(.308)	.000(.000)		(等分散性棄却)		
4) 学校の授業の復習をしている	.446(.502)	.321(.471)	.150(.366)	.350(.489)	0.2422	1.9092	4.5483 *	①>③、③<④
5) 苦手な教科の勉強をしている	.554(.502)	.411(.496)	.250(.444)	.200(.410)	1.3608	7.4188 **	0.3155	①>③
6) テストで間違えた問題について勉強している	.482(.504)	.321(.471)	.300(.470)	.150(.366)	5.2370 *	2.9773	0.0062	①>②
4 あなたは算数についてのどのようになっていますか(算数観)								
1) 算数の勉強は好きだ	.643(.483)	.643(.483)	.450(.510)	.300(.470)	1.6864	5.6719 *	1.6864	②>④
2) 算数の勉強は大切だ	.982(.134)	.964(.187)	.750(.444)	.750(.444)	0.0498	15.7046 **	0.0498	①>③、②>④
3) 算数の授業は内容がよくわかる	.875(.334)	.821(.386)	.700(.470)	.750(.444)	0.0012	2.0197	0.9923	
4) 算数の授業で新しい問題に出会ったとき、それを解いてみたい	.839(.371)	.750(.437)	.600(.503)	.550(.510)	0.9839	6.1706 *	0.0783	①>③
5) 算数の問題の解き方がわからないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える	.875(.334)	.732(.447)	.650(.489)	.500(.513)	5.3730 *	6.3469 *	0.0032	①>③、②>④、①>②
6) 算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える	.661(.478)	.571(.499)	.500(.513)	.400(.503)	1.6044	2.5178	0.0051	
7) 算数の授業で学習したことは将来、社会に出たときに役に立つ	.946(.227)	.982(.134)	.750(.437)	.850(.366)	2.5989	9.4078 *	0.5831	①>③
8) 算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える	.911(.288)	.750(.437)	.750(.444)	.550(.510)	7.5662 **	4.9348 *	0.0897	①>②、③>④、①>③、②>④
9) 算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている	.821(.386)	.839(.371)	.750(.444)	.550(.510)	4.4217 *	3.4817	6.3258 *	②>④、③>④
10) 算数の授業で問題の解き方や考え方がわかるようにノートに書いている	.750(.437)	.821(.386)	.700(.470)	.700(.470)	0.2164	1.1239	0.2164	

*p<.05、**p<.01

表4 家庭学習時間の参加別・時期による2要因分散分析

	参加者(n=56)		不参加者(n=20)		時期	主効果 参加別	交互作用	下位検定結果
	① 6月	② 2月	③ 6月	④ 2月				
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F値	F値	F値	
2 (3) 平日に家庭学習(塾や家庭教師を含む)をする時間が1時間以上と回答した割合	.661(.478)	.446(.502)	.350(.489)	.150(.366)	9.0733 **	8.6716 **	0.0108	①>②、①>③、③>④、②>④
(4) 休日に家庭学習(塾や家庭教師を含む)をする時間が2時間以上と回答した割合	.286(.456)	.107(.312)	.100(.308)	.100(.308)	2.4464	1.5273	2.4464	

*p<.05、**p<.01

参加者と不参加者との間で6月にはなかった有意差が2月に生じていた(下位検定における②>④)。全体的な特徴に反して参加者の肯定回答割合が減少しておらず、これも寺子屋の影響の可能性があると考えられた。その他の項目については、寺子屋の影響があるとは考えられなかった。

2) 家庭学習時間に関する分析結果

「家庭生活習慣」6問のうち、家庭学習時間に関する2問について分析した。岡山県教育委員会が公表している分析方法⁸⁾にならい、「平日に家庭学習(塾や家庭教師を含む)をする時間が1時間以上と回答した割合」「休日に家庭学習(塾や家庭教師を含む)をする時間が2時間以上と回答した割合」を求め、そのそれぞれについて、参加別・時期による2要因分散分析を行った(表4)。その結果、平日の家庭学習時間については、参加者・不参加者ともに2月の肯定回答割合が6月より有意に減少しており、両者の有意差が変化していないことから、寺子屋の影響は考えられなかった。また、休日の家庭学習時間については有意な差はなかった。

3) 考察

1)・2)の分析結果から、家庭学習習慣及び家庭学習時間に関しては、寺子屋の影響は統計的には認められなかった。算数観のうち、4-9)「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」については、寺子屋で公式やきまりの復習を丁寧に行った結果、機械的・盲目的に公式を覚えようとするのではなく、考えた上で理解しようとするようになった児童が増えたと考えられた。また、4-1)「算数の勉強は好きだ」については、寺子屋で「わかった」「できた」経験を重ねた参加者の肯定回答割合が2月になっても減らず、そのような経験のなかった不参加者の肯定回答割合が減ったため、2月の有意差を生んだものと考えられた。

このように、寺子屋の影響と推認される結果はごくわずかであり、文部科学省の学習状況調査の結果を変化させるほどの影響力はなかったと考えられた。小学校の算数の授業時数は、第2学年から第6学年まですべて175時間(1時間は45分)であり⁹⁾、寺子屋が24時間(1時間は60分)であったことを考えると、当然の帰結とも言える。しかし、教師の役割は子どもの意欲に「火をつける」ことである。大学生との学習が触媒となって児童の家庭学習意欲が「点火する」のもありうることで、そのような児童が一人でも増えるよう、今後の寺子屋の在り方を工夫する必要があるとも言える結果であった。

(2) 児童アンケートに見られる成果と課題

寺子屋に「参加してどのように変わったか」「寺子屋のよいところ」について、参加した児童を対象に質問紙調査を行った。回答したのは欠席者を除く57人、調査日は寺子屋最終回の2014年2月26日であった。回答は「1

あてはまる、2 どちらかといえばあてはまる、3 どちらかといえばあてはまらない、4 あてはまらない」の4件法で、他に、自由記述欄を設けた。質問の意味が理解できない児童のいることを想定し、学生が質問を読み、必要に応じて説明を付して一斉に回答させた。質問に対し「1 あてはまる」「2 どちらかといえばあてはまる」のいずれかに回答したものを肯定回答とし、その百分率を算出した。

1) 「参加してどのように変わったか」の分析結果(表5)と考察

1-2)「忘れていたところやよくわからなかったところがわかるようになった」のポイントが最も高く(87.7)、次いで1-3)「算数の問題がわからなくても、がんばって最後まで考えるようになった」(78.9)だった。前学年の復習により、定着度の低かったところを補うことができ、粘り強い学習意欲につながったものと考えられる。これらに対し、1-4)「予習や復習など、家で勉強をする時間が前よりも増えた」は29.8ポイントしかなかった。これ

表5 「参加してどのように変わったか」の百分率と自由記述

参加してどのように変わったか	%
1) 前よりも算数が好きになった	57.9
2) 忘れていたところやよくわからなかったところがわかるようになった	87.7
3) 算数の問題がわからなくても、がんばって最後まで考えるようになった	78.9
4) 予習や復習など、家で勉強をする時間が前よりも増えた	29.8
自由記述	個
・「計算が速くなった」など、計算速度の向上	14
・「計算が正確になった」など、計算精度の向上	2
・字がうまくなった	1
・計算が得意になった	1
・忘れていた問題を思い出した	1
・わからない問題ができるようになった	1
・計算がほとんど暗算でできるようになった	1

表6 「寺子屋のよいところ」の百分率と自由記述

寺子屋のよいところ	%
1) 放課後も友だちといっしょにいられるのがよい	84.2
2) 大学生が勉強を見てくれるのがよい	73.7
3) 算数の問題にたくさん挑戦できるのがよい	57.9
4) 家に帰っても勉強しない(できない)ので、学校で勉強できるのがよい	59.6
自由記述	個
・「先生が楽しい」など、大学生の人柄	2
・復習できるのがよい	4
・「勉強が楽しい」など、全体的な楽しさ	4
・わかるまで教えてくれる	1
・特定の学生と話せるのがよい	1

は、4の(1)「抜粋学習状況調査に見られる成果と課題」で分析した結果と同じ傾向で、寺子屋は家庭学習時間の増加にはさほど影響していなかったと考えられるが、逆に、4人に一人は家庭学習時間が増えたと認識していることもわかった。

自由記述によると、計算速度や計算精度の向上など、算数の基礎的な技能が向上したと自覚している児童が多い。年間24時間の補充学習であっても、寺子屋は基礎基本の徹底には効果があると考えられる。

2) 「寺子屋のよいところ」の分析結果(表6)と考察
最もポイントの高かったのが2-1)「放課後も友だちといっしょにいられるのがよい」で、84.2ポイントだった。2-2)「大学生が勉強を見てくれるのがよい」も73.7ポイントあった。寺子屋で学生はゲーム的な要素を取り入れた学習活動や共同的な学習活動も行っており、児童は友達と楽しく勉強させてくれる学生及び算数学習をおおむね歓迎していると考えられた。これは、自由記述からもうかがえる。

なお、2-4)「家に帰っても勉強しない(できない)ので、学校で勉強できるのがよい」の項目を設けたのは、寺子屋があるためにかえって家庭学習をしなくなっているのではないかという懸念からである。59.6ポイントあることから、その懸念は払拭されず、今後さらに検討する必要があると言える。

(3) 教師インタビュー結果と考察

寺子屋の影響が推認される児童の変化や、寺子屋の課題等について、担任教師5名(3年、4年、5年、6年、特別支援学級)を対象にインタビュー(半構造化面接)を行った。面接は管理職の了解のもと校長室にて行い、記録のために録音した。教師には日常の観察、児童や保護者との会話、算数の評価などをもとに、質問に答えてもらった。面接日は寺子屋が終了した翌週の2014年2月21日であった。逐語記録を要約し、内容によって表7のように分類した。

1) 寺子屋の影響

寺子屋の影響と推認できるエピソードに共通しているのは、児童の学習意欲の向上である。教師発言Aは学生との触れ合いの要素もあり、Eは達成感の要素もあると考えられた。ただ、教育成果の要因は常に複合しており、まして、深い児童理解と信頼関係のもと、使命感や責任感、教育的愛情をもって日々の指導にあたっている担任教師にしてみれば、児童の成長は日頃の教育活動の成果との自負もあろう。エピソードと寺子屋の影響とを結びつけるのは慎重でなければならない。

2) 寺子屋のよさ

5人の教師の話に共通していた要素が「触れ合い」「個別指導」「達成感」である。「触れ合い」については、キの「担任では味わえない魅力」に象徴されている。児童

にとって心理的距離を近く感じられるのが学生の魅力であり、お兄さん・お姉さんのような学生が親身になってマンツーマンで教えてくれることは、寺子屋のよさとして「個別指導」が指摘されていることにもつながっている。サにあるように、担任による個別指導に量的な限界があることも、寺子屋で個別指導が行われることのよさを後押ししているように思われる。中には理解が不十分なままになっている児童もおり、それを補うことができるのが寺子屋のメリットと言える。そして、ク・セからもわかるように、児童はこれまで十分ではなかった「わかった」「できた」という「達成感」を味わえる境地に導かれることを切望している。算数という教科の特徴から、達成感を味わえるのは問題が解けた瞬間あるいは正解の丸をたくさんつけてもらえたときである。その期待に一層多く応えられるよう学生の取組を工夫することで、寺子屋のよさは増していくと考える。

なお、発言ソにある、授業とのリンクについては、平成26年度の寺子屋に反映させていきたい。

3) 寺子屋の今後の課題

タ・ツにみられるように、担任教師は児童との会話から寺子屋に負担感のあることを喝破し、課題意識を持っている。本来帰宅して遊べる時間であった水曜日の放課後に寺子屋に参加するという事は、「消費主体」¹⁰である児童にとっては自分の時間や学習する我慢と引き換えに寺子屋の授業を「買う」ことに等しい。学生は自らの指導技術をブラッシュアップし、児童が支払う対価にふさわしい達成感や充実感を提供できるよう、学習内容、学習方法を一層工夫する必要がある。

5. おわりに

以上、寺子屋で学生が取り組んだ概要を報告し、学習習慣の定着の観点から、その成果と課題を検討した。学校教育の膨大な時間に比して、寺子屋の時間はごくわずかである。しかし、教育の成果は量に比例するとは限らない。寺子屋は平成26年度も継続する。寺子屋に臨む学生には、わずかな時間であっても児童のやる気にスイッチが入るような、情熱あふれる指導を期待したい。

《謝辞》

放課後寺子屋の実施及び本研究にご協力いただいた津山市立高倉小学校の先生方、地域の方々、児童に深く感謝いたします。

表 7 教師インタビュー結果

分類	教師発言
寺子屋の影響	
学習意欲	ア D児、E児、F児、G児(いずれも女児)は仲がよくて、寺子屋の前になると問題集を持ってきて「先生、ここをするんじゃないけど、よう意味が分からん」とか聞いてきて、教えたことが何度かある(筆者注:寺子屋で使う問題集の予習をしたということ)。学生に教えてもらったときに分からなかったら恥ずかしいからという気持ちからかもしれない。(6年生)
	イ A児は算数の力が伸びてきた。自主学习でもノート写しなどをし、算数に対する意欲が高まってきている。前学年で取りこぼしていたところが寺子屋で復習してわかるようになり、4年生の学習がよりわかりやすくなっている面はあると思う。(4年生)
	ウ C児(アンケート1(2)「授業の復習をしている」が否定的回答から肯定的回答に転じた。)は自主学习で4年生の算数(少数×整数)を勉強している。5年生で少数×少数の勉強があるので、そうしているのだと思うが、寺子屋の影響があるかもしれない。(5年生)
	エ 2学期末に生活を振り返るアンケートをしたが、H児と児はどちらも「算数が前よりもわかるようになった」「最後まであきらめずに考えるようになった」と書いていた。定着とかを見ていくと、意欲も上昇している。(6年生)
寺子屋のよさ	
触れ合い	オ B児は寺子屋をととても楽しみにしている。学生と触れ合うのが楽しいみたいだ。(4年生)
	カ 児童が学生にあだ名をつけたり、「〇〇先生と話した」と言っているところから、学生に会うことや話すことを楽しみにしているのを感じる。(5年生)
	キ 児童は大学生のお兄さん、お姉さんと会うのを楽しみにしている。担任では味わえない魅力を感じているらしい。
個別指導	ク 児童は一斉指導よりも個別指導で「わかった」「できた」感じを得ているようで、「あの先生の教え方はとてもよかったです」という感想をしばしば耳にした。
	ケ D児、E児、F児、G児は特にマンツーマンで見てもらえた時に「今日はとても分かりやすかったです」とよく言っていた。学生と勉強することに関しては児童も歓迎している。(6年生)
	コ J児は個別指導が必要な子で、マンツーマンでのかわりをどの場面でも喜び、張り合いに思う子なので、寺子屋でマンツーマンで教えてもらったのはよかった。(6年生)
	サ 授業でも個別指導はするが、学力差がかなりあり、各児童に時間を割いてというのは難しい面もある。その点、寺子屋で個別指導してもらえるのはありがたかった。
達成感	シ 「寺子屋は簡単じゃけん、えんじゃ」(筆者注:「問題が簡単だからよい)」という声を耳にすることが多い。その一方で、算数が苦手な子などは、寺子屋が終わった時に「今日はできた」と満足していることもある。(3年生)
	ス 寺子屋の学習が終わった時にシールをもらうことがあるが、それは児童も喜んでいる。(4年生)
補充学習	セ 算数はこれまでに学習したことがわかっていないと積み上げが難しい面があるので、寺子屋で前学年の復習をするのは必ず役に立っていると思う。
授業リンク	ソ 4年生の分数の学習をする直前に寺子屋で3年生の分数を復習することがあったが、このときは、児童が授業で既習学習を思い出していた。だから、児童も4年生の分数の学習に入りやすかった。(4年生)
今後の課題	
タ	水曜日は本来5時間で帰宅できる日。前日に学級で「明日は寺子屋があります」というと、「えー(嫌だな+楽しみだな)」という声が一斉に上がる。寺子屋に参加するということは6時間目(しかも通常授業より15分も長い)をするということ。気候や行事によっては疲れ果てていることもある。だから、それだけの投資に見合う内容と結果が必要だろう。
チ	できれば、学校の授業と寺子屋の復習内容がリンクしているとありがたい。寺子屋で復習した後に同じ分野の新しい内容を学校で授業するというペースになると、寺子屋の学習が今の学年の予習になり、児童にとってもよいのではないか。すると、「寺子屋をしていると授業もわかりやすくなる」ということになって、寺子屋の意義が増すと思う。
ツ	大学にとっては学生が模擬授業することが大切なのだと思うが、子どもにとっては授業の延長になってしまい、負担感があったと思う。一斉指導をしたのちに個別指導というのでは、学生にとってはプラスになるのだから、子どもにとってはほとんど授業と同じになってしまう。

《引用文献・参考文献・注》

- 岡山県教育庁指導課 「平成 24 年度全国学力・学習状況調査」結果の概要
http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/330482_1526827_misc.pdf 平成 24 年 8 月 8 日付 (アクセス 2013/4/20)
- 2013 年 9 月 7 日 山陽新聞朝刊
- 元高倉小学校長の芦田愛五氏(現美作大学准教授)による。
- 中央教育審議会 今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)2006
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm (アクセス 2014/3/4)
- 佐藤晃子 近年の「子どもの放課後」をめぐる政策的変容に関する一考察 —「生活の場」としての学童保育の位置づけを巡って— 生涯学習・社会教育学研究 33 45-54 2008
- 文部科学省 放課後子どもプランの推進について http://manabi-mirai.mext.go.jp/houkago/propulsion.html (アクセス 2014/3/4)
- 地域の読み聞かせグループ(9人)を中心に、紙芝居や節分など、郷土の文化的学習に応じたボランティアが指導にあたった。
- 1に同じ
- 学校教育法施行規則別表第1(第51条関係)による。
- 消費主体として授業に臨み指導を受けていることについては、内田樹 下流志向 学ばない子どもたち働かない若者たち 講談社文庫 2009 に詳しい。